

Book Review

義歯補綴医×矯正歯科医 クロストーク

審美と機能の回復・維持を目的とした
28 歯のポジショニング

松田謙一・長濱加奈・鷺見圭輔 編

● ● ●

Reviewer

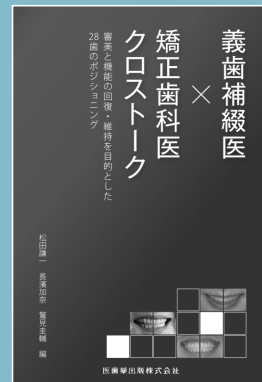
小田師巳 Norimi Oda

(大阪府・おだデンタルクリニック)

四六判, 144 頁

定価 4,950 円

医歯薬出版刊



本書を手にしてまず驚いたのが、タイトルと内容構成の斬新さである。補綴医と矯正歯科医（以下、矯正医）による包括的治療に関して、補綴医、または矯正医が、それぞれの立場から自身が行った治療に対する考え方を述べている書籍は散見するが、本書は治療計画を立案するうえで重要な項目における両者の考え方が、章ごとにクロストーク形式でまとめられている。そのため、両者の思考回路のどこに共通点があり、どこに相違点があるのかについて容易に理解できる。

評者自身は、補綴医（一般歯科医）の立場から矯正医に矯正治療を依頼する形で包括的治療を行っており、それなりの症例数の経験もあるため矯正医の考え方はおおよそ理解しているつもりであったが、本書を読み進むにつれてこれほど思考回路の違いがあったのかと正直驚いた。

たとえば、患者を診る入口から違ったのだと改めて気付かされた点は、第1章「治療対象とエンドポイント」における、補綴医は正面観を、矯正医は側方面観を重視しているという内容で

ある。いわれてみるとそのとおりで、われわれ補綴医はX線写真においてもまずパノラマ（正面観）を撮影するが、矯正医はセファロ（側方面観）を撮影して診断していくわけである。当然、画像を見る方向が異なれば思考回路も異なる点があるはずで、お互いがその違いを理解することは包括的な治療計画を双方向で立案していくうえで非常に重要であると考えられる。また、第2章「咬合高径と咬合平面」、第3章「水平的顎間関係」でも同様の考え方の違いがあることが詳述されており、特に「水平的顎間関係」においては、補綴医は正面観から左右方向への関係をイメージするのに対し、矯正医は側方面観における前後的な関係をイメージするということが記されており、同じ用語から連想するイメージですらこれほど違うという事実は非常に興味深い。

第4、5章「前歯、白歯のポジションについて」においても両者には大きな違いがあり、特に前歯部では補綴医は審美的な配慮から上顎を基準に考えるが、矯正医は歯牙移動の自由度の低

さから下顎前歯を基準に治療計画を考えるという大前提を、補綴医は十分理解しておく必要がある。

第6章「Ⅱ級、Ⅲ級症例へのアプローチとその難しさ」では、このような症例に対する治療の考え方や対応策の説明が両者からなされており、その内容は圧巻である。最後の第7章「矯正医から補綴医へのクエスチョン」では、矯正治療後の咬合調整や付与する咬合について解説がなされており、矯正医がどのようなことを考えながら咬合を構築しているのかが理解できる。

松田謙一氏が冒頭の結びで述べているように、本書はセファロなどの難しいことは考えずに、両分野の専門医の考え方の違いを気楽に理解する“読み物”として楽しんでいただければ、実際に包括的治療を行うときに、円滑に治療計画を立案することができる下地ができているものとする。本書は、矯正を含めた包括的治療を志す一般歯科医、矯正医の両者にぜひ読んでいただきたい1冊であると、強く推薦する。